論　壇

ベルギーの古都ルーヴェンにおける世界文化遺産の保存と活用

―主として大ベギン会修道院群（Groot Begijnhof）をめぐって―

Preservation and Utilization of the UNESCO World Heritage in Leuven, Belgium

安田　　彰*
YASUDA, Akira

はじめに
Ⅰ．ルーヴェンのあらまし
Ⅱ．UNESCO 世界文化遺産：ルーヴェン・大ベギン会修道院群
　1．フランドル地方のベギン会修道院群
　2．ベギン会修道院とは
　3．ルーヴェン・大ベギン会修道院群
Ⅲ．大ベギン会修道院群の現状と活用
　1．ルーヴェン・カトリック大学と大ベギン会修道院
　2．本遺産の活用方の現状と課題
Ⅳ．まとめ―大ベギン会修道院群の保存が投げかけるもの
主要参考文献

はじめに

UNESCO 世界文化遺産は世界各地に点在するが，ベルギーの首都ブリュッセルに程近いルーヴェン市における大ベギン会修道院群[1]は，その保存と活用の仕方が独特である。

本稿では，その歴史的経緯と遺産登録の内容，現在の保存と活用の実態について，先行する資料紹介にもとづき，また2013年３月の訪問調査と滞在経験を踏まえて，その概要を報告し，あわせて今後の遺産保存の在り方を考えてみることとしたい[2]。

なお本調査は，本学の2012年度個人研究費の助成を受けて実施したものである。

＊本学経営学部教授

1　Begijnhof（蘭），Beguinage（英）の訳語としては，『世界遺産大辞典（上）・（下）』（世界遺産アカデミー）によると「ベギン会の建物」「ベギン会館」となっているが，ここではその内容と分かりやすさを考慮して「ベギン会修道院群」とした（正確には後述するように“半俗修道院”とすべきであろうが）。ただし，文脈によっては「ベギン」「ベギン会」「ベギーヌ（ベギン会の女性）」等と使い分けた。

2　本稿の写真はすべて筆者の撮影に依る。図は筆者による製作と筆者の写真に一部手を加えたものであるが，図１，２は既存の地図（“Leuven Tourist Gude: Street wise in Leuven”）の一部 PDF である。

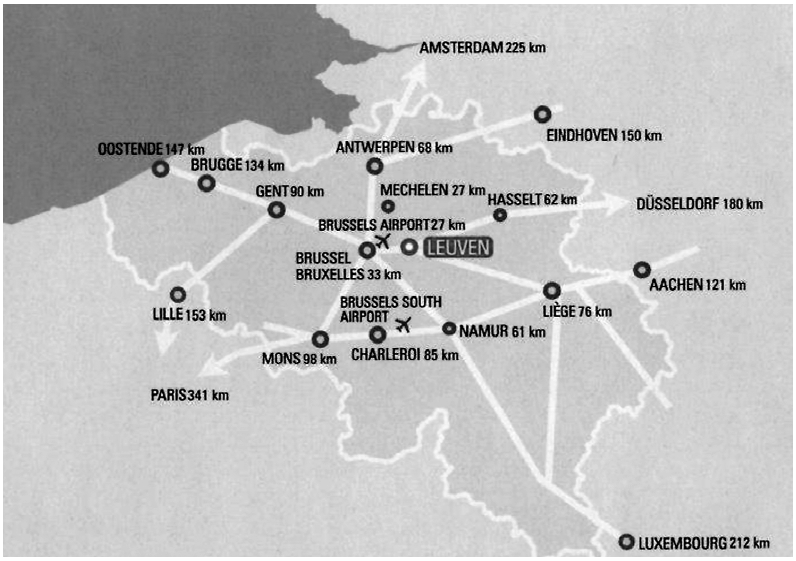

図１　ベルギー全図

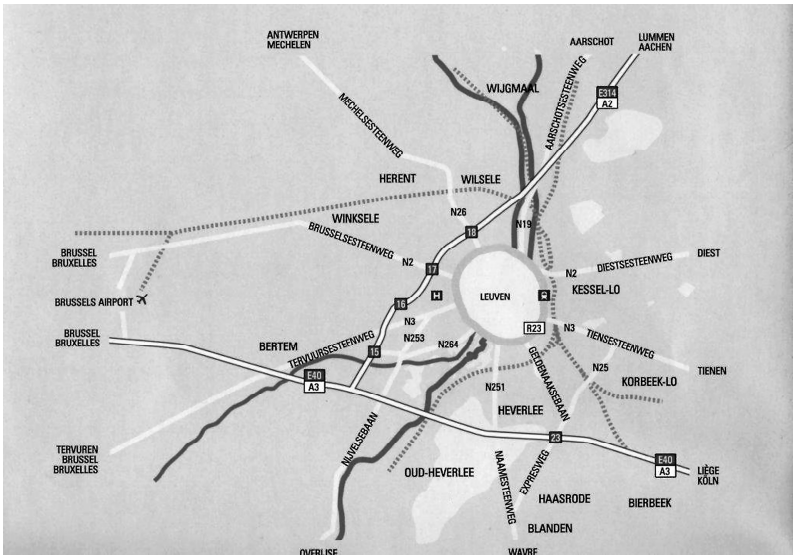

図２　ルーベン交通図

Ⅰ．ルーヴェン［Leuven（蘭），Louvan（仏）］のあらまし

本遺産のあるルーヴェン市は，ブリュッセル（Brussels）から東に25kmほど離れた首都に近隣する都市である。東京から西でいえば小金井市にあたるくらいの距離だ（図１）。ベルギーのいわゆるフランドル地方，フレミッシュ・ブラバント州（Flemish Brabant）の州都で，人口は9.8万人（2012年１月現在）。ブリュッセルからは列車で20分，ブリュッセル空港からも列車でほぼ同様の時間で到着できる交通至便の町である。高速道路もよく整備されており，主要２幹線E40，E314の交差点にあたる（図２）。

町の歴史は古く，Loven（蘭）の名の初出は９

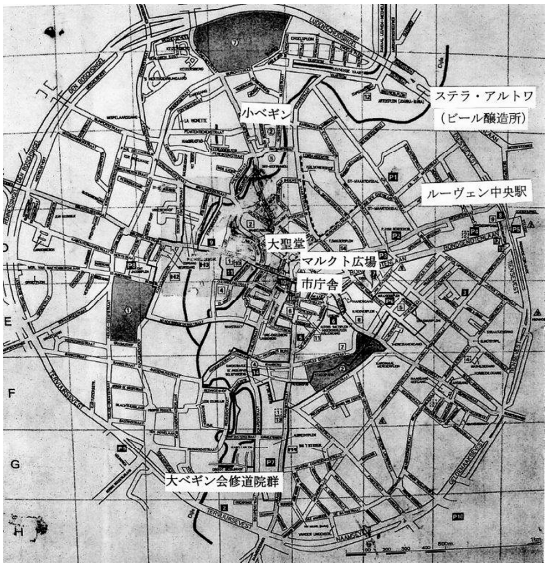

図３　ルーベン市街図

写真１　広場と市庁舎

写真２　大聖堂・聖ペテロ教会

世紀に遡る。町はダイル（Dijle）川のほとりに発展し，当時のルーヴェン伯ほか諸侯の要塞に近かったこともあって，11世紀から14世紀にかけてはブラバント公国の毛織物取引の拠点として栄え，さまざまな商業が殷賑を極めた。やがて15世紀に入ってブリュッセルが商業の中心地に取って代わらんとする頃，1425年，この地方初にして最大の大学ルーヴェン・カトリック大学（Katholieke Universiteit Leuven, K. U. ルーヴェン）が創立された。哲学者エラスムス（1466～1536）や地理・地図学者メルカトール（1512～94），神学者ヤンセン（1585～1638）などを輩出，K. U. ルーヴェンは現在なお15の学部と３つの専門大学（college）を持つベルギー最大にして最高の学府として４万人の学生を擁している（2013年現在）。

このように　ルーヴェンは住民の半数近くが学生という学生町ではあるが，町のいたるところには歴史的な建造物が残されており，中世の典型的な城塞都市の面影が色濃い。町を取り囲む環状道路は要塞に沿って造られており，その中にはマルクト（市場）広場をはじめ，市庁舎と大聖堂（聖ペテロ教会）が聳え，旧市街には附属病院を含む大学の諸施設や，数多くの教会や商業施設が広がる（図３・写真１，２）。

したがってこの町は学生町であると同時に観光にも力を入れており，中心部の飲食産業や宿泊産業は教育関係者を意識しつつも，関連事業者は幅広いツーリズム振興への取り組みに熱心である（写真３）。

また，主要産業としてはこの他，ベルギー最大の産業の１つであるビール製造がある。AB InBeb である（写真４）。18世紀に造られたこの醸造所は，後に世界最大の Interbrew（2004年

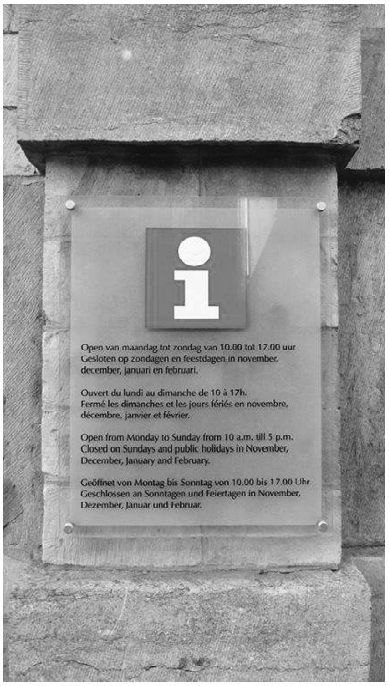

写真３　ツーリスト・インフォメーションセンター（TIC）の看板

写真４　ステラ・アルトワ：ビール工場

InBeb に改称）として隆盛を極め，20世紀には一時30カ所を超えるビール工場が互いに鎬を削ったこともあった。しかし現在は，この InBeb の他には個人経営の Domus という醸造所を市内に残すのみとなった。InBeb 本社とそのステラ・アルトワ（Stella Artois）醸造所の建物は，駅前から沿線沿に隣駅のメヘレン運河まで広がり，市の東北部の大部分を占めている。

Ⅱ．UNESCO 世界文化遺産：ルーヴェン・大ベギン会修道院群［ Groot Begijnhof（蘭），Great Beguinage（英）］

１．「フランドル地方のベギン会修道院群」について

こうしたルーヴェン市の南のはずれ，環状線の内側（所在：Schapenstraat）に**大ベギン会修道院群（Groot Begijnhof, Great Beguinage）**がある。既述のとおり町は城壁に囲まれた円形をしており，その中心部にマルクト広場と市庁舎，大聖堂があって，人々の生活や信仰の核になっていた。そうしたにぎわいや華やぎから離れて，ひっそりと大ベギン会修道院群は存在している（図３，写真５）。

ベギン会修道院群はここだけではなく同じ市内にもある。やはりここも北のはずれにあって，規模が小さいので小ベギン会修道院群（Klein Begijnhof, Small Beguinage）と呼ばれている（所在：Halfmaartstraat）（図３，写真６）。

実は UNESCO の世界文化遺産指定はルーヴェンの大小ベギン会修道院群に留まっていない。指定は「フランドル地方のベギン会の建物（Flemish Beguinages）」となっていて，ベルギー北部のフランドル地方に点在するベギン会の建物群が併せまとめて指定されているのである。ベギン会はベルギーをはじめ，オランダや北・北東フランス，西・北西ドイツにも残っているが，指定されたのはフランドル地方の13件で，この中にはブルッヘ（ブルージュ）やヘント（ゲント），アントウェルペン（アントワープ）のものも含まれている。

２．ベギン会修道院とは

ところで，そもそもベギン会修道院とはどういうもので，どういった経緯でできたのであろうか。

写真５　大ベギン会修道院群

写真６　小ベギン会修道院群

辞書（*Webster's New World Dictionary*, 1988）によると，Beguine とは「12世紀，低地地帯（いまのベネルックス地帯にあたる：引用者注）に始まった，神への終身の貞節を誓うわけではない平俗の女子修道会員」とある。

また，*Leuven Tourist Guide 2013* の分冊“Architecture and Sculptures”には，わかりやすくこう解説されている。

「ベギーヌ（Beguines）とは一時的に神に対する敬虔と従順を誓った女性たちをいう。尼僧とは違って宗教的な誓いを立てるわけではなく，かといって貧者のしきたりに従うわけでもなかった。それゆえ彼らは自身の財産を持っていた。彼らは自分たち自身のお金や寄付によって，あるいは人に教えたり，病人の世話をしたり，縫い物や刺繍，糸紡ぎなどの手仕事をしたりした収入によって生計を立てていたのである。より豊かなベギーヌは会館施設（beguinage）内に自宅を持った。貧しい仲間は集会所や共同住宅に一緒に住んだ。病人や貧しい老女は施療院に入れられた」。

一方『世界遺産大辞典』（NPO 法人世界遺産アカデミー，2012）には「フランドル地方のベギン会の建物」の説明としてこう書かれている。

「ベルギー北西部のフランドル地方に点在するベギン会の建物は，修道院には属さず，キリスト教の敬虔な生活を送る女性たちが共同生活を行なった会館である。

ベギン会館は堀で囲まれた敷地のなかに住居，教会，付属建築物，中庭などが設けられた，現在の集合住宅のような建築物である。なかには病院や学校も建てられたひとつの街のようなものまである」。

また，ベルギーの歴史家アンリ・ピレンヌ（Henri Pirenne, 1862～1935）の研究をふまえたとする資料（“Beginage”, Wikipedia 2013）はこう述べている。

「ベギン会とは女性たちの宗教運動（religious movement）であった。それは，ベルギーの歴史家アンリ・ピレンヌによれば，多くの男たちの命を奪った暴力や戦争，軍事もしくは半軍事的行動の結果，残された女性たちが増加したためであった。女性たちの多くは自ら団結して，富める慈善家の施しを集団的に仰ぐしかなかったのである」。

さらに12世紀の同様な動き，女子修道院が当初成功を収めたことに触れ，一方ではシトー派（Cistercian）等の僧院の規律があまりに厳格であったため，もっと規則の厳しくない環境を求める女性たちが増えたこと，さらには受け入れを求める女性たちが急増したため入院資格を厳しくせざるを得なかったこと，あるいは入院条件として一定程度の適性を求めたこと等が，逆にベギン会隆

盛の背景となったことが挙げられている。こうした要求をしなかったドミニコ派等の町の修道会が成功したのも，まさに同じ理由からだと付け加えている。

３．ルーヴェン・大ベギン会修道院群

このように12世紀からベルギーのフランス語圏（リエージュ等）を中心に発展し，やがて，ベルギー，オランダ，ドイツ，フランスと広がりを見せたベギン会であったが，UNESCO 世界文化遺産に指定されている「フランドル地方のベギン会の建物」13件のうち，ルーヴェンがことに有名であるのは，その規模の大きさと良好な保存状態によるものである。

もちろんその他にもコルトレイクやヘント（ゲント）等，各地に有名なベギン会修道院群がある。筆者がこの時訪問したのは，ブルッヘ（日本では“ブルージュ”というフランス語読みの方が有名だが）のそれである。ここは1245年，この地方の領主フランドル伯の妻が始めたベギン会館で，1928年まで生活していた最後のベギーヌがいたことで有名である。約700年間の歴史に幕を下ろした後，ベネディクト会がここを買取り，今なお同会の修道女が暮らしている（写真７）。

さて，ルーヴェンの大ベギン（Groot Begijnhof）である。この地区は既述のとおり町の南，環状道路のすぐ内側にある。マルクト広場からは徒歩で15分ほどで行けるものの，町の中心からは外れた，当時としては郊外に程近い場所であったろう。

写真７　ブルッヘのベネディクト会修道院

写真８　大ベギン会修道院群の北門

まずは北門（写真８）にある案内板によってその概要を見てみよう。

「ルーヴェン大ベギン会修道院群へようこそ。

1998年12月２日，この遺跡は他の12のフランドル地方のベギン会修道院群とともに，ユネスコ世界遺産のリストに入りました。この時ユネスコはこの遺跡の類まれな世界的価値を認めるとともに，その保護と保存へ向けた確たる取り組みをも表明したのです。フランドル地方のベギン会修道院群はそれを生み出した中世の神秘主義運動の貴重な証言です。ベギーヌとは“宗教的な女性たち”であって，自立的に生きようと願い，貞節と貧困を誓いつつ，既存秩序の外で人生を送ろうとした寡婦や未婚女性たちです。建築的かつ都会的な特質を生かしつつ，彼らは自助的な“平和の街”を自らの力で組織したのです。ダイル河畔のこの広大なベギン会修道院群は，そのゴシック教会や記念碑的な病棟の残る施療院，また“kerckecamer

教会”（No.94）やシエブレの家（訳注：修道院の名）とともに，1963年から1990年にかけ，カソリック・ルーヴェン大学によって修復されました。ここに住んでいるのは主に教授や学生達です」。

これを見ると，その保全と修復にはカソリック・ルーヴェン大学の尽力が大きかったことがわかる。“Leuven, architecture and sculptures”によると，ここが作られたのは1205年という。フランドル地方最大の残存ベギン会修道院群で，その広さは約３ヘクタール，最盛期は17世紀で，約360人のベギーヌ（ベギン会の女性）が住んでいた。1795年，ベギン会は革命後のフランスによって廃止されたが，198人のベギーヌが自宅に残る許可をもらった。その多くが年寄りであったためという。

現在の大ベギンは昔ながらの狭い小道や井戸跡のある小さな広場，あるいはところどころに庭園や小公園がある閑静な住宅街である。伝統的な手法で焼いた砂岩づくりの古い家々や過去の修道院が連なる，いわば町中の街である（図４）。

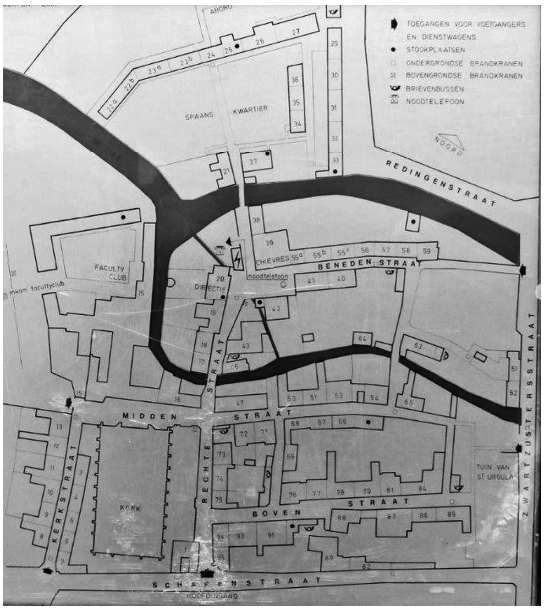

図４　大ベギン案内図

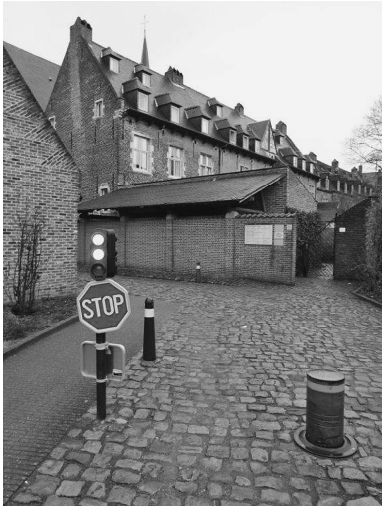

写真９　車止め

実際に歩いて見ると，石畳が昔のままで，丸みを帯びた不規則な石が無造作に並べられていて，実に歩きにくい。料金も取らぬ入場自由の場所であるにもかかわらず，３月という寒い季節であったためか観光客も少なく，ほとんどが一人かもしくはカップル。時折数人がガイドツアーをやっているのが目に留まる程度で，町は中世さながらひっそりとしている。住む人の気配はほとんどなく，窓辺にゼラニウムが置かれていたり，自転車が立てかけてあったり，あるいは公園に薔薇やハマナスが咲いていたりするのが，住人のいる証となっている。

路がこうした状態であるうえに，また静謐な環境を守るという観点からも，自動車の乗り入れは禁止されている。ここの街中に車庫はない。引っ越しや工事の車は事前に許可をもらって，出入りをする。町の東入口には車止めがあって，許可証をかざさない限り車の出入りは出来ない（写真９）。

住人の交通手段は自転車だ。この地に限らず，ベルギーやオランダには専用道路が完備し，町に出ると自動車や徒歩者より自転車が幅を利かせている（写真10，11）。

写真10　自転車専用道路

写真11　通学風景

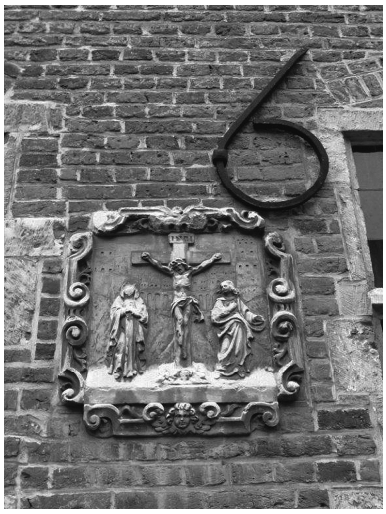

写真12　聖書による浮彫

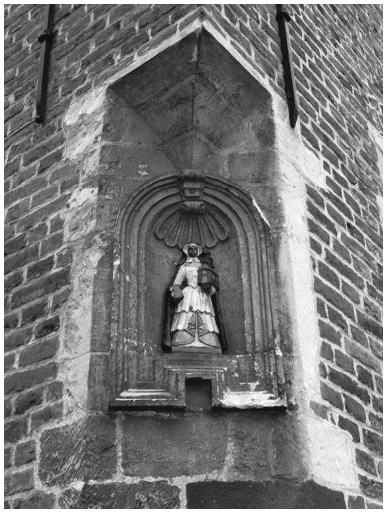

写真13　ベギーヌ像

写真14　大ベギン会修道院群

建物のいたるところには，聖書に題材をとった浮彫や彫像がはめ込まれ，ベギーヌの像もあったりする（写真12，13）。通りのブロック単位が小さいので，角を曲がるたびに教会や尖塔のある建物が見え隠れする。景観は歩くにつれて変化し，角々に街灯や運河や橋が見えて，いつまでも見飽きない（写真14，15，16）。

町中の街なので，“大ベギン”といっても規模は小さく，端から端まで歩いても15分とかからない。ただ，夏は涼しいだろうが，冬は石畳みだけ

写真15　大ベギン会修道院群

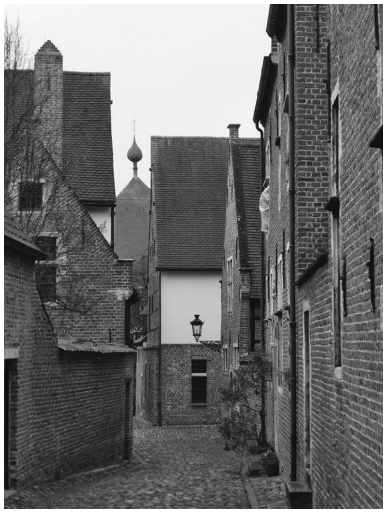

写真16　大ベギン会修道院群

に足元から底冷えがする。

大ベギンがこうした素晴らしい保存状態であるのに対し，**小ベギン会修道院群**（**Klein Begijnhof，Small Beguinage**）は厳しい状況だ。「小」といわれるだけに，見つけるのに難儀した。環状道路の内側ではあるが，町の北のはずれ，聖ゲルトルード教会（修道院）の近くにある。教会はすぐに見つかったが，小ベギンが見つからない。何度も行き来し，通りの名前が Klein Begijnhof

写真17　小ベギン会修道院群

とあったので，幾度も確かめてようやくこれと納得した（写真17）。

歴史にその名が出てくるのが1272年。この界隈は１本の通りと２つの袋小路からなっており，先のこの修道院に仕える女性が住んでいた。財政難を抱えており，最盛期でも100人足らず，フランス革命後は目に見えて人数が減り，建物は急速に傷んでいった。1636年創設のこの教会は1862年に取り壊され診療所となったが，1954年，急成長を遂げるビール会社ステラ・アルトワ醸造所に明け渡さざるを得なかった。2000年，小ベギン会修道院群として残されたものが完全修復され，個人住宅として売りに出された。今日では白壁の約30軒がベギン会の伝統的フランドル様式を残すのみとなっている。

Ⅲ．大ベギン会修道院群の現状と活用

１．ルーヴェン・カトリック大学（KUL）と大ベギン会修道院群

以上，小ベギン会修道院群の厳しい現状を含め，その概要を見てきた。世界遺産登録がなされ，そ

写真18　ツーリズム・インフォメーション・センター（TIC）の看板

写真19　TIC 事務所

の保存活動や魅力の PR については，関係者がそれぞれの立場で取り組んでいる。ここルーヴェンに限ったことではなかろうが，Tourism Leuven は，大ベギン会修道院群を含むルーヴェンを魅力ある観光資源として捉え，ツーリズム振興の観点からさまざまな取組みを行なっている。各種ツアーの催行や出版物の刊行等それなりの事業展開も意欲的に行われている（写真18，19）。

しかし注目すべきは，20世紀後半の大修復のみならず，現在なお大ベギン会修道院群の保存は市ではなく，基本的にルーヴェン・カトリック大学（以下 KUL）が行なっていることだ。KUL は 1962 年，社会福祉協議会（Social Welfare Commission）からこの地区を買い取り，これまで見てきたとおり1964年から1989年に到るまで大補修を行なっている。そして補修した家々を学生や大学関係者に住居として住まわせている。かつての施療院や共同住宅「シエブレ修道院（Convent of Chievres）」は会議施設“Faculty Club”として，面目を新たに各種の集会やミーティング，会議に使われている（写真20）。

写真20　Faculty Club

世界遺産の保存や活用の手法はさまざまであろうが，観光対象としてのみならず，こうした思い切った形で活用しているケースは珍しいのではなかろうか。その実際を KUL のホームページによって詳しく見てみよう。

まずは KUL の基本的な考え方だ。1.9万人もいる教職員（内大学病院関係者9000人）や４万人もいる学生の希望者すべてを大ベギンに住まわせるわけにはいかない。そこで優先順位をつけて，招請客員の教授や特別研究員（フェロー），シニア研究員を中心に，１年間の限定つきで長期・短

写真21　家族用住宅

写真22　単身者用住宅

写真23　フラット No.84のある建物

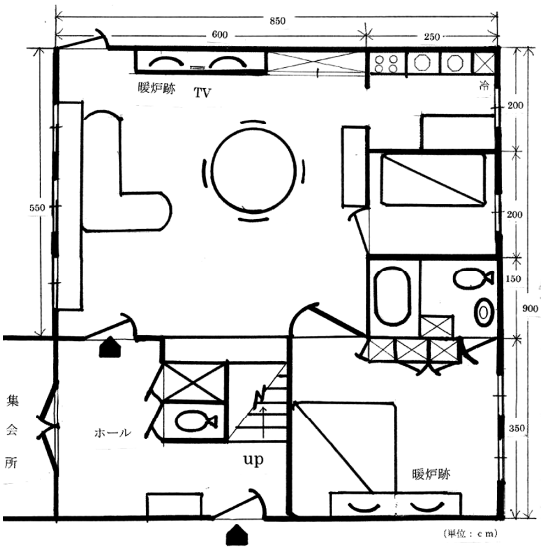

図５　フラット No.84の間取り

期の賃貸を行なっている。世界遺産に居住できるというので海外客員からの人気は高く，入居はなかなか大変のようだ。対象となるフラット（家族用に同一階の数室をユニットにしたもの）が41，家屋（house）が４（１家屋にフラットは６つ以下）である。家族用の大きめの住宅（写真21）と単身者用の住宅（写真22）とがある。

ある日本人客員研究員の４人家族（夫婦と幼児２人）が住んでいる No.84（写真23）の間取りを見てみよう。その概要は図５の通りである。

部屋タイプによって異なるが，２ベッドルームのフラットの場合，家賃は光熱費・税・保険代を含め１カ月985ユーロから1055ユーロである。寝具関連，タオルをはじめ，基本的な家具や冷蔵庫，電子レンジ，食器，TV 等は完備しており，料理用コンロは電熱で，基本的に暖房も含め直火はない。ここの広さは共有の玄関ホール部分を入れると76.5㎡，これを除く専有面積では61㎡（約18.5坪）で，若い４人家族には十分な広さだろう。建物の共有玄関は共通のカギ，自宅のカギは専用のカギと使い分けられるようになっている。共有玄関を入ると，目の前に別家族が住む２階への階段

がある。このホールの左手は集会所だ。集会所のためのトイレや物置もあるが，普段はカギがかかっている。この建物は中庭を囲むようにして立っており，中庭は居住者しか使えない。出入り口には「立入禁止」の表示がある（写真24）。郵便受けや自転車置き場，ランドリーは共同使用で，近くにある（写真25，26，27，28）。

ここの使い勝手上の問題は，世界遺産なので釘を打ったり塗り替えたりの変更ができないこと，使わなくなった暖炉の土が時に振動でぼろぼろと落ちてきたり，手作りのゆがんだガラスの入った窓が開け閉め時に軋むことくらいだろうか（この点は KUL のホームページの当該ページに，「歴史的な建造物で古い施設もあるので」と断りが入っている）。ペットは禁止，自動車の厳しい乗り入れ規制については既述した。

一方，留学生を含む一般学生用にはあちこちの建物が利用されている。大ベギン近くの元修道院等の施設も使われている。ひと月近く短期留学したある海外学生の報告書によると（PDF: Leuven

写真24　立入禁止（“私有”）

写真25　郵便受け

写真26　自転車置き場

写真27　共同ランドリー入口

写真28　共同ランドリー内部

写真29　学生用宿舎

Tour-Study Abroad, “Loyola New Orleans in Leuven, Belgium” 2013)，その施設は通りを隔てて大ベギンに接している黒修道女会（Black Sister）を改修したもので，現在はイエズス大学ロヨラ・カレッジの学生30人が使っているものだ（写真29）。勉学のために数人は残ってはいるものの，空室となる夏休み期間だけ国際留学生向けに

写真30　市の PR 看板

貸し出す仕組みになっている。「部屋は２，３人で使用，シーツ，枕，掛布団が用意され，Wi-Fi 環境が整備」とあり，また共有スペースの台所については「皿やなべ等調理器具はさまざま，冷蔵庫，電子レンジ，コンロが使える」とあり，「学生たちは近くのお店（grocery）で食材を買って，自分の食事を作れる。これは持ち金を“引き延ばす”にはいい」と書いている。

このケースの家賃は不明だが，大ベギンのいわゆるスタジオ・フラット（１ベッドルーム）の場合では，月725ユーロ，ダブルベッドで２人使用の場合は780ユーロだという（KUL ホームページ，Accommodation による）。

２．本遺産の活用方の現状と課題

単なる観光目的のための修復や保存のための保存ではなく，あるいは必要に迫られた消極的な修繕ではなく，積極的に遺産を修繕して賃貸住宅として活用する――そんな政策はこの地区をどう変化させたのだろうか。

町のところどころに，市が立てた PR 看板がある。“おや，科学の足どり（Aha! Footsteps of

Science)”というシリーズで，オランダ語のほか，裏面に英仏独西語で書かれている（写真30）。ここ大ベギン会修道院群の北門入口にも立っている。読んでみると「世界遺産地区」とあって「大ベギン会修道院群は町（city）の中の街（town）です。フランドル地方最大のベギン会修道院群で，1998年以来ユネスコの世界遺産リストにのっています」と解説がある。

大きな見出しに，「住人450～500人」とある。真ん中には乳母車を押すママと赤ちゃんを抱き上げるパパの影絵があって，大きな文字で「8」と書かれている。よく見ると「年間誕生数」とあって，ハイハイする赤ちゃんの影絵が8つある。つまり住人は若いカップルが多く，「毎年8人ずつ新生児が増えているよ」と言いたいらしい。その左隣には建物の影絵があって75の数字が書かれている。大型家屋（house）は75棟あるようだ。学生専用住宅が18棟，家族向け住宅が22棟，それに145室がスタジオとアパートメントとなるらしい。さらに住人に関する解説があって「ここに住むのは a)KUL のスタッフ，b)来訪教授と国際研究者，c)学生です」とある。

そして下段にはこんなことが書かれている。

「ここでは1232年以来，人々が時代や環境の変化に合わせ，当時はベギン会修道院として，今日では人々と文化の坩堝として，お互いにさまざまなコミュニティーを作り上げてきました。それは貴重な遺産がいかにして啓発的（inspiring）な住宅街に変わり得るかの事例教科書なのです」。

なるほど，ルーヴェンが大学町で，若い街であるだけにこうした未来志向の PR も説得力がある。

Ⅳ．まとめ―大ベギン会修道院群保存が投げかけるもの

しかしながら，世界遺産に人が住む，それもかつて半俗の修道女が住んでいた歴史的にも貴重な施設に，単なる住居目的で大学関係者や学者，学生が住む。世界遺産認定の厳しい条件として，また保存の条件としてこうしたことは許されるのであろうか？

「人が住む世界遺産」といえば，日本では「白川郷や五箇山の合掌造り集落」が思い起こされる。しかしこれはむしろ，従来からの人々の伝統的な暮らしぶりや風俗習慣がその認定条件の大きな要素でもあったろうから，保存と維持の観点から当然のこととして，このルーヴェンの場合は果たしてどうなのだろう。

そこで改めて世界遺産認定の条件と該当する遺産の認定内容を『世界遺産大辞典』によって確認しておこう。

世界遺産の登録基準は(ⅰ)から(ⅹ)までである。そのうちの(ⅰ)から(ⅵ)までが文化遺産に絡むもので，(ⅶ)から(ⅹ)までは自然遺産関連の基準である。ここではそのうち，本論の吟味に必要な(ⅰ)から(ⅵ)についてのみ見ておこう。

(ⅰ)人類の創造的資質を示す傑作。

(ⅱ)建築や技術，記念碑，都市計画，景観設計の発展において，ある期間または世界の文化圏内での重要な価値観の交流を示すもの。

(ⅲ)現存する，あるいは消滅した文化的伝統または文明の存在に関する独特な証拠を伝えるもの。

(ⅳ)人類の歴史上において代表的な段階を示す，建築様式，建築技術または科学技術の総合体，もしくは景観の顕著な見本。

(ⅴ)ある文化（または複数の文化）を代表する伝統的集落や土地・海上利用の顕著な見本，または，取り返しのつかない変化の影響により危機にさらされている，人類と環境との交流を示す顕著な見本。

(ⅵ)顕著な普遍的価値を持つ出来事もしくは生きた伝統，または思想，信仰，芸術的・文学的

所産と，直接または実質的関連のあるもの（この基準は，他の基準とあわせて用いられることが望ましい）。

これで見ると「フランドル地方のベギン会の建物」は登録基準の(ii)，(iii)，(iv)に該当する。すなわち(ii)中世の一定期間，建築技術・都市計画・景観デザインの上でベギーヌ達の交流があり，(iii)やがてその修道院の生活文化が消滅した類まれな証拠であって，かつ(iv)建築の様式や技術，景観が代表的な発展段階を示している，と見なされたのである。日本との比較でいうなら，(ii)法隆寺地域の仏教建造物群に相当し，(iii)古都奈良の文化財や(iv)厳島神社に相通うものがあることになる。半俗の修道女の存続や信仰住民現存の有無，当時からの人々の生活ぶりの継続が特に問われているわけではない。

一方，「白川郷・五箇山の合掌造り集落」は，登録基準の(iv)，(v)に該当する。

すなわち，(iv)合掌造りという代表的な段階を示す建築の様式・技術もしくは景観の見本であると同時に，(v)人々の暮らしや文化を代表する伝統的集落の例で，現代化の波にさらされその存続が危ぶまれる，人と環境との関わり合いを示す顕著な遺産ということだろう。

ベギン会修道院群が該当しない基準(v)は，日本では他にも「石見銀山遺跡とその文化的景観」に適用されており（登録基準(ii)，(iii)，(v)），それはここが伝統的集落でかつ銀山採掘は消滅してしまったものの，採掘後の植林など人と環境との関わり合いが特に際立っているとされたからに他ならない。

人が住み続ける村落の世界遺産としては，白川郷の他にハンガリーの「ホッローケの古い村落とその周辺」やスロバキアの「ヴェルコリニェツ」があるが，前者は登録対象65軒に対し住人が28人しかいないこともあってか(v)のみによる登録であり，また45軒の物件が指定された後者は白川郷同様(iv)(v)による登録となっている。他にも住民との関わりから見ると，イタリアの「アルベロベッロのトゥルッリ」が(iii)，(iv)，(v)，迷路で有名なモロッコの「フェズの旧市街」が(ii)，(v)となっている。いずれの場合も(v)が不可欠の登録基準となっており，登録の上で，住民やその生活ぶりと遺産とが密接不離の関係にあることが窺われる。

こうしてみると，ベギン会修道院群の登録は，ベギーヌ達の生活ぶりや信仰生活の伝統の有無よりは，そうしたものがかつて存在したという歴史的事実や当時の貴重な建築物の保全，街並みや景観が重視されたからだと言えるだろう。

重要な文化財の保護保全の在り方についてはさまざまな議論がある。できるだけ手を加えず当時のままを再現・保存する“完全主義”がいいのか，それよりもむしろ現代人との関わり合いを重視し，多少の変更や手直しをしてでも過去の遺産を現代に生かした方がいいのか，議論の分かれるところである。ただ歴史は現代に生かして初めて価値があると考えれば，両者の接点は必ずどこかにあるはずだ。多くの遺産，とりわけ建築物や街並み景観を中心にする都市型の遺産は外観のみを保全して，内部は現代人にも使い勝手のいいように改修するケースが多い。ベギン会修道院群もその例外ではない。

筆者の滞在中，この地区で葬儀があって，教会（Sint-Jan-Doperkerk）には大勢の地区住民が参列し，出入りしていたが，これなども普段はひっそりとして人影のない遺産が今なお冠婚葬祭の要になって生きている好ましい事例であった。

世界遺産の保護・保全は必ずしも一様ではない。建造物一つにしても，石造りの街・西洋と木造りの街・日本とではその活かし方は同一ではなかろう。現在の日本の文化遺産13件のうち，ここルーヴェンの事例をそのまま取り入れて，居住を前提

に賃貸物件化してその保存に資することができる遺産は考えにくい。

しかし登録済みの京都や奈良，日光，さらには将来の指定可能性のある鎌倉，長崎等，多様な文化財や貴重な街並みまで広げて考えるとどうだろう。成功事例としてよく取り上げられる岐阜県・飛騨高山や福島県の大内宿，あるいは長野・岐阜県の妻籠宿・馬篭宿等について，その景観と宿泊施設の在り方，地域活性化へ向けた幅広い手法等を改めて考え直す一助にはなるだろう。

過疎の進む地方都市や山間部についても，例えば長野県松本市の空き家の短期賃貸の動き（「バックパッカーズ松本の宿」）が有名だが，空き家の有効活用は大阪をはじめ各地で研究が進んでいるし，福井，尾道等ではNPOも立ち上がっているようなので，これをさらに進める参考事例になるのではないか。

さらに対象を広げて，高度成長下に急増したリゾート別荘地の空き家対策に関しても，これを参考にすれば，避暑地・避寒地としての街並みや景観を生かした整備の仕方，あるいはさまざまな資金調達の手法や会員制をはじめとする諸制度の設計，インターネットを駆使した予約手法など，不動産会社が主導して仕組みを構築するのもあながち非現実的な話ではなかろう。

とはいえ，ルーヴェンでも課題，問題がないわけではない。

KULのホームページ（kuleuven/Japanese）を見るかぎり，大学の予算は基本的に文部省からの支給に依存しており，このところ研究補助金の増額という朗報がある一方で，恒常的な人的資源の不足が否めないようだ。さらにまた研究とは別に，大学のインフラ整備にあたっても，歴史的建造物の保全修理が「非常に重大な課題」になっていると言及している。これを見ても大ベギン会修道院群を活用した賃貸収入が世界遺産の修繕に十分な寄与をしているとは言い難く，恒常的な補修経費の加重は避けられない様子である。

どうやら，文化遺産の保存維持には，経済効果を意識したさまざまな取り組みが欠かせないにせよ，一方で「人はパンのみに生きるに非ず」という矜持も忘れてはならないようである。

主要参考文献
『すべてがわかる世界遺産大辞典（上）・（下）』（NPO法人世界遺産アカデミー，2012）。
『読んで旅する世界の歴史と文化　オランダ・ベルギー』（栗原福也監修，新潮社，1995）。
Leuven Tourist Guide 2013（Tourism Leuven, 2013）
（1）Architecture and Sculptures
（2）Street wise in Leuven
（3）Events and Activities
（4）University and Colleges
（5）Lodging in Leuven
（6）Group Tours and Day Trips
（7）Cycling and Walking
Legendary Living Leuven（THILL S. A., 2013）
Leuven: ja.wikipedia.org.
www. visitflanders.jp
www. kuleuven.be/english

以上